

二〇一三年度

頌栄女子学院中学校

入学試験問題（第一回）

受 験 番 号

国 語

《配 点》

一〇〇点

《試験時間》

四〇分

《注 意 事 項》

- 一 合図があるまで、これを開いてはいけません。
- 二 問題は14ページの冊子になっています。答えはすべて解答用紙に記入して下さい。解答用紙は一枚で、この中に折りこまれています。最初によく確認し、ぬけているものがあつたら、手をあげて申し出て下さい。
- 三 試験が始まったら、解答用紙の左にある欄に、氏名と受験番号（算用数字で）を、正しく記入して下さい。受験番号は、問題表紙にも記入して下さい。
- 四 解答用紙の*印の欄には、何も記入しないで下さい。

※字数指定のある問いでは、特にことわりのない限り、句読点等の符号も一字分と数えます。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〈問題文中の※は、終わりに注があります。また、問題文の表記を一部書き改めてあります。〉

※¹ ランタン谷で、僕は変わったと思う。

① それまでのように、何の疑いもなく科学を信じていたことが、僕にはできなくなった。確かに、僕たちのもっている好奇心は大切なものだ。なにかを不思議と感じ、その謎を追究し、研究していくこと。それは人間のいちばん大切な行為の一つだと思う。思うけれど、たくさんのお金を使い、他のものを犠牲にしてまで、それは、するに値することだろうか。

ヨーロッパでできた近代科学というのは、もともとお金や時間に恵まれた人たちや、そういう援助を受けた人たちがつくりだしたものだ。その人たちは根っから自然や物事を タンキユウするのが好きで、それがもたくなって科学ができた。そういう人たちは、「アマチュア」と呼ばれた。今ではアマチュアというと、素人という意味になる。プロに対して、たんなる素人ということで、なんだか軽蔑されているように聞こえる。

でも、アマチュアという言葉のそもそもの意味は、「愛する人」ということだ。自然を、学問を愛する人が、アマチュアなのである。そういう人たちが、自分のお金や、王様とか貴族とかお金持ちに援助してもらったお金で研究をしたことで、科学ができたのである。だから、科学や学問は、そういうふうに分の好きなことをできる人が、その ^Bカンシンのおもむくままに発展させたからこそできたとも言える。

【ア】今の科学には、ますますお金がかかるようになった。ロケットを打ち上げたり、巨大な ^{※2}サイクロトロンをつくったりするには、莫大なお金がかかる。僕たちの氷河調査隊なんか、そういう巨大科学に比べれば、ほんとうにちっぽけなものだけれど、それだって、自分一人のお金でまかなえるものではない。

【イ】なにか新しいことを見つかるための科学には、そうやってお金がかかるのである。けれども、そういうもの

だけが科学なのだろうか。いろいろなものを発見したり発明したら、それで僕たちは幸福になるのだろうか。

【ウ】だが、日本だけでなく、世界でも、「科学者」と呼ばれる人たちの大部分は、大学や研究所にいる。その人たちの研究は、みんなが出す税金で支えられているのだ。みんなの税金を使ってやるのだから、ただ自分の好きなことをやる、というのではなく、ほんとうにみんなが大事だと思ふことを研究すべきだし、そういうことにまずお金を使わなければならない。だが、今の科学は、果たしてそうになっているだろうか？

【エ】いまでも、趣味で鳥を研究したり、虫を調べたりする人たちはたくさんいる。プロの研究者より、そういう人たちのほうがくわしいことも少なくない。そんなふうには、自分にできる範囲で好きなことを研究するのなら、何をやっていいのだ。

そうではないはずだ。僕たちがそうやって、いつしうけんめいに発展させてきた科学は、原子爆弾を産み、フロンをつくり、ダイオキシンをつくった。

みんな、決して悪意でつくったのではない。けれども、結果としてみると、二〇世紀の科学がつくり出したものは、とりわけその最先端の科学がつくり出したものは、ことごとく人類を不幸にしているように見える。

もともと人間には、知的な好奇心があるのだから、それを無理やり止めようとするこのほうが危険なのかもしれない。それよりは自由なほうがいい、と思う。そう思うけれど、現実にはクロン人間をつくる技術や、^Cノウシ状態で臓器を移植できる技術が進んできて、どこまでそういうことをやっていいか、という難しい問題が出てきているのである。

いっぽうでは、僕たちは大きな危機に直面している。これまで自然は無限だ、と思ってきたために、僕たちは地球の自然をあまりに壊してしまった。地球の植物が三五億年かかってつくってくれたオゾン層を、一九三〇年代に発明されたフロンガスによってたった六〇年足らずで破壊してしまったのは、その顕著な例である。それだけではない。僕たちが科学の力でつくってきたさまざまな ^Dカガク物質は、いまや地球上の川や湖や海に流れ込み、そこに生きる魚や貝や虫たちを汚染している。それを食べることによって、けつきよくは僕たち自身の体もむしばまれていくのだ。

それにもかかわらず、僕たちは毎日のように、分解できないさまざまなゴミを捨て、さらにこの地球を汚染している。コンピュータも自動車もテレビも ^Eレイゾウも、次々に新製品が出てきて、より便利に、より快適になると言われるけれど、

それを買うためには古い製品を捨てなければならず、捨てたものはほとんどがゴミになるのだ。

僕たちの生活は、ほんとうに豊かなのだろうか？

② 働いて、結局はまた新たなゴミを産み出すための買い物をさせられているだけなのではないだろうか。そして、そうやって科学が進めば進むほど、また新しい問題が起きてくるのではないだろうか。

僕は、そういう今の科学を、「二〇世紀型の科学」と名付けたい。それは科学だけでなく、経済学でも哲学でも同じかもしれない。自然が無限であり、環境はいくら壊しても自然に直るものだ、と人類がまだ信じていた時代の科学や学問。それは、この二〇世紀とともに終わるべき運命にある。いや、現実には、
③、科学はますます巨大化
であるならなおのこと、これとはちがった科学、「二一世紀型の科学」を、いまこそ発展させなければいけないのだ。

それは、僕たちがこの二〇世紀を通じて壊してしまった自然や環境を、できるだけもとにとりもどすための科学、環境の科学である。

ランタン村で知ったことは、二〇世紀の科学というのは、結局のところ、どんなに環境を壊しても、
④その科学そのものが
進めばそれでよしとする科学だった、ということである。つまり二〇世紀の科学では、その分野の研究が進めば、その結果、ほかでどんなことが起きようとも許されるのだ。

それは、科学者とか研究者と呼ばれる人たちの生き方を見ればよい。僕たちも含めて、現代の科学者や研究者は、自分の専門とする分野をもっている。その分野には、いくつかの定評のある学会があつて、そこで研究成果を認められ、評価され、賞賛されることが、科学者や研究者の最大の望みなのだ。

だから、こんなことが起きても少しもふしぎはない。ある研究者は、人間が環境を壊したせいで絶滅しそうな鳥を研究していた。いつしうけんめい研究して、すばらしい論文を書き、みんなから賞賛されたけれど、論文を書くことに忙しくて、その鳥が棲める環境を取り戻すための努力はなんもしなかったのだ、その鳥は、彼が論文をまとめたあとで絶滅してしまった。

もう一人の研究者も、やはり同じように絶滅しそうな鳥を研究していた。だが、彼のほうは、その鳥がなんと

か絶滅しないうですむように、お役所とかけあつたり、その鳥のすみかを壊そうとする開発業者と闘つたりすることに時間をとられ、ちっとも論文はまどまらなかつた。でも彼のおかげでその鳥のすみかは守られ、絶滅からはまぬがれることができた。

科学者、研究者として、どちらがいいのだろうか？

X、これは極端な例かもしれない。僕たちは科学者、研究者である以上、どちらを選ぶというより、その両方であ

りたい。
Y、いま地球は病んでいるのだ。しかも、かなりの重病なのである。そういう病人を前にして、「いま僕はほかの研究で忙しいので、あなたのことは診察できません」というお医者さんにはなりたくない。とりわけ、地球科学の研究をしてきた僕たちは、地球のことを、その生物もふくめていちばんよく知っている専門家だ。いわば、地球のお医者さんなのである。

そういうお医者さんが、いま
⑤からといって、地球を見殺しにしているのだろうか。

医学には、基礎医学と臨床医学がある。病気の原因を研究するのが基礎医学、実際に患者さんを診て、治療するのが臨床医学だ。実際に地球が病んでいても、それを治療する科学がなかったのである。

X、治療は簡単ではない。
Y、とにかく応急処置が必要なのに、それさえ放っておかれることが多すぎる。

ランタン谷で出会ったタギギの問題も、ゴミの問題も、そしてランタン村の人たちが村を追い出されるかもしれないという問題も、みんな緊急に解決しなければならぬ問題なのに、それに対処する科学がないのである。そういう科学、環境問題を解決するための科学、地球の臨床医学を、今こそつくらなければならない。

(小野 有五 著『ヒマラヤで考えたこと』より)

※1 ランタン谷……地理学者である筆者は、一九八二年八月から十一月まで、ネパールにある世界最高峰の

ヒマラヤ山脈にあるこの土地で、氷河調査隊の一員として活動していた。

※2 サイクロトロン……電気を帯びた粒子を加速する円形の装置。原子核や素粒子の実験、医療に用いる。

問一 ― A、E のカタカナを、漢字に直してていねいに書きなさい。

問二 次の一文を入れるのに最も適当な所を問題文中から探し、その直後にくる一文の最初の五字をぬき出して答えなさい。

これまで、二〇世紀の科学は、言ってみればみんな基礎医学だった。

問三 ― ①「それまでのように、何の疑いもなく科学を信じていたことが、僕にはできなくなった」とありますが、この説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア なにかを不思議と思いそれを追究していく行為は、人間として大切だということ。
- イ たくさんのお金を使い他のものを犠牲にしてまで、科学の研究を進めていくこと。
- ウ 科学は自分の好きなことができる立場の人が、生み出し育てたものだということ。
- エ 決して悪意はないのに、今の科学は我々人間を不幸にしているように見えること。

問四 問題文中の【ア】、【エ】の各段落は、順序が入れかわっています。正しい順序になるよう並びかえ、その順序をア～エの記号を並べて答えなさい。

問五 ② に入れるのに最も適当な語を、ひらがな四字で答えなさい。ただし、「あ」から始まる語が入ります。

問六 ③ に入れるのに最も適当な言葉を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ブレーキをなくした車のよう
- イ 飛ぶことを忘れたペンギンのように
- ウ 檻にとらわれたゾウのように
- エ 舵をこわしてしまった船のように

問七 ― ④「その科学そのものが進めばそれでよしとする科学」とありますが、その説明として適当でないものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア いろいろなものを発見したり発明したり、なにか新しいことを見つけるためのお金がかかる科学。
- イ ほかにどんなことが起きようとも、その分野の研究が進めばそれで許されてしまう科学。
- ウ 絶滅が心配される生物を熱心に研究するが、その絶滅を食い止めようという努力などしない科学。
- エ 絶滅が心配される生物を熱心に研究し、その絶滅を実際に食い止めることのできる科学。

問八 ⑤ X、Y (問題文中に二か所ずつあります) に入る語の組み合わせとして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア X そのくせ Y でも
- イ X たしかに Y いや
- ウ X たとえば Y また
- エ X もちろん Y だが

問九 ⑥ に入れるのに適当な言葉を、七字以内で答えなさい。ただし、体の一部を表す漢字を用いた慣用句が入ります。

問十 問題文の筆者の言う「二一世紀型の科学」とは、どのような「科学」ですか。問題文中の語句を用いて、九十字以内で説明しなさい。

② 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〈問題文中の※は、終わりに注があります。また、問題文の表記を一部書き改めてあります。〉

十一歳の夏休み、仕事で一カ月ヨーロッパを回っていた父親から、お土産に万年筆をもらった。銀色で細身の、スイス製の万年筆だった。

キャップを取ると、磨き込まれた流線型のペン先が現れ、それは見ているだけでも ■が高鳴るほどに美しく、持ち手の裏側にはその曲線によく似合う筆記体で、私のイニシャルYHが彫つてあった。

おもちや以外のお土産をもらうのは生まれて初めてだったし、まわりで万年筆を使っている子など一人もいなかったから、自分が ■飛びに大人になったような気がした。この万年筆さえ手にしていれば、何か特別な力を発揮できると信じた。私はいつどんな時も、書きたくて書きたくてたまらなくなった。国語の漢字練習帳があるからと母に嘘をつき、お金をもらって大学ノートを買った。学校から帰るとランドセルを置き、真つすぐ机の前に向かってとにかく万年筆のキャップを外した。

いざとなつて、自分が何を書くつもりなのか、ちつとも考えていないことに気づいた。私はひるまなかつた。そんなことは大した問題とは思えなかつた。インクがしみ出してくる瞬間や、紙とペン先がこすれ合う音や、罫線の間を埋めてゆく文字の連なりの方が、ずっと大事なのだった。

大人たちはすぐに、娘が何やら夢中になつて書いていると気づいたが、必要以上に干渉はしなかつた。とにかく机の前で書き物をしているのだから、それは勉強、例えば漢字の書き取りのようなものに違いないと思ひ込んだらしい。

スリッパをはいて階段を登つてはいけなとか、お風呂に入った後は冷たいものを飲んではいけないとか、あの頃課せられていた多くの禁止事項の中に《書き物》が加えられなかつた代わりに、大人たちは誰も書かれた内容については興味を示さなかつた。

②

、という訳だ。

私はまず手始めに、自分の好きな本の一節を書き写してみた。『フアーブル昆虫記』のフンコロガシの章。『太陽の戦士』の出だしのところ。『アンデルセン童話集』から『ヒナギク』と『赤いくつ』。アン・シャリーが朗読する詩。『恐竜図鑑』のプテラノドンの項。『世界のお菓子』、トライフルとマカロンの作り方。……

③ 想像したよりずっとわくわくする作業だった。たとえ自分が考えた言葉ではないにしても、それらが私の指先を擦り抜けて目の前に現れた途端、いとおしい気持ちに満たされた。

言葉たちはみんな私の味方だ。あやふやなもの、じれったいもの、臆病なもの、何でもすべて形に変えてくれる。ブルーブラックのインクで縁取られた、言葉という形に。

そしてふと気がついて手を休めると、ノート一面びっしり文字で埋めつくされている。ついさつきまでただの白い紙だったページに、意味が与えられている。しかもそれを授けたのは自分自身なのだ。

私は疲労感と優越感の両方に浸りながらページを撫で付けた。まるで世界の隠された法則を、手に入れたかのような気分だった。

《書き物》に対する態度が、他の大人と唯一違っていたのがキリコさんだった。干渉しない点については同じだが、彼女は明らかにこの作業を、勉強とは違う種類のものとして認めていた。

④ さえ払っていたと言つてもいい。

子供部屋やダイニングテーブルで作業に熱中している私を見つけると、一瞬キリコさんは立ち止まり、姿勢をただし、邪魔しないように注意を払いながら通り過ぎた。あるいはおやつを運んでくる時は、不用意にノートの中身に目をやって盗み見していると誤解されないよう、気を使っているのが分かった。自分の手元に視線を落とし、一切声は掛けず、ノートからでるだけ遠いところにジュースを置いた。コップに付いた水滴で、ページが濡れてはいけなかつたと思つたからだろう。

やがて私は他人の文章を書き写すだけでは満足できなくなり、作文とも日記ともお話ともつかないものを書き付けるようになった。クラスメイト全員の人物評と先生の悪口、一週間の食事メニュー、百万円あったら買いたい品物のリスト、テレビ漫画の予想ストーリー、自分の生い立ち・みなしご編、無人島への架空の旅行記。とにかく、ありとあらゆるものだった。今日は何にも書くことがないという日は、一日もなかった。キャップさえ外せば、万年筆はいつでも忠実に働いた。

⑤ だから初めて インクが□□□時は、うろたえた。

「どうしよう、万年筆が壊れちゃった」

私は叫び声を上げた。

「もう壊しちゃったの？ せつかくのパパのお土産なのに。新しいのは買いませんからね。壊したあなたが悪いんです」

新しいのは買いませんからね——これが母の口癖であり、得意の台詞だった。私は自分の不注意を呪い、絶望して泣いた。

「大丈夫。⑤ インクが□□だけなんだから、補充すれば元通りよ」

救ってくれたのは、やはりキリコさんだった。

「スイスのインクなのよ。パパがまたスイスへ行くまで待たなきゃならないの？」

「いいえ。街の文房具屋さんへ行けば、必ず売っています」

必ずという言葉が強調するように、キリコさんは大きくうなずいた。

キリコさんは正しかった。私は万年筆を壊してなどいなかった。約束どおり彼女は新しいインクを買ってきて、補充してくれた。ケースの裏に書いてある説明書は外国語だったから、二人とも読めなかったけれど、彼女は慎重に方向を見定め、^{※2}崇高な儀式の仕上げをするように、万年筆の奥にインクを押し込めた。

「ほらね」

それがよみがえったのを確かめると、キリコさんは得意そうに唇をなめた。⑥ 一層唇が光って見えた。

「絶対ママには内緒にしておいてね」

誘ったのはキリコさんの方なのに、何度となく私は念を押した。

「平気よ」

本当にキリコさんは平気な顔をしていた。私たちは歯医者者の帰り、寄り道して一緒にチョコレートパフェを食べていた。高級なフランス料理であれ、屋台の焼きそばであれ、母は子供が家の外で食べ物を口にするのは、衛生上好ましくないと信じていた。

「ここのはね、フルーツが新鮮で美味しいの」

彼女は大きな桃を飲み込んだ。

口の中にはまだ石膏と消毒液の匂いが残っていて、それがチョコレートと混じり合い奇妙な味がした。詰め物をしたばかりの奥歯は、ものを噛むたびカクカク音がした。

立派なパフェだった。フリル型に広がったガラス容器からあふれるほどに、ウエハースやバナナや生クリームが盛り付けであった。キリコさんは長いスプーンを真ん中に突き刺し、せっかくのデコレーションが崩れるのも構わず、底のチョコ

レートを手く上げて食べた。

「痛かった？」

彼女は尋ねた。

「そうでもない」

私は首を横に振った。

「よく歯医者になんか行く勇気があるわね。まだほんの子供なのに」

「歯は大切なよ。だって永久歯が抜けたら、二度と生えてこないんだもの。誰だって指を切断されたら悲しむでしょ？」

⑦ もう元に戻らないからよ。歯だって一緒。一度抜けたらおしまい。なのにみんな、指ほどには大事にしないの」

ふうん、とうなずきながら、キリコさんはスプーンの背でバナナをつぶした。

「でもやっぱりごめんだわ。口の中に手をつ込まれて、べろの裏から喉の奥までのぞかれたうえに、ドリルで穴を開けられるのよ。考えただけでぞっとする」

口元からチョコレートが垂れそうになり、あわててキリコさんはナプキンで拭いた。せっかくの口紅がとれてしまうのではないかと、私は心配した。しかしそれはまだ艶やかさを失っていないかった。チョコレートよりもずっとべたべたして、甘そうだった。

「ねえ……」

私は前から気になっていた話題を、思い切って持ち出してみた。

「口紅を塗るって、どんな感じ？」

ああ、そんな簡単なこと、というふうには彼女はナプキンを丸めて転がし、バッグから口紅を取り出した。

「塗ってみれば分かるわ」

私はそれをくるくる回し、先を出したり引つ込めたりした。もうずいぶんすり減っていた。

「さあ、こうするの」

キリコさんは身を乗り出し、あつという間に私の唇を真っ赤にした。

「うん、なかなかよ」

私は喫茶店の窓ガラスに映った自分の顔を眺めた。キリコさんほど素敵ではなかった。歯の治療に失敗して、たちの悪いバイキンに感染したみたいに、口だけが腫れ上がって見えた。そのうえ、なめてみてもチョコレートのように甘くはなかった。さつき歯茎に打たれた、麻酔薬の味に似ていた。

「大変。ママに知れたらとんでもないことになる」

あわてて私はナプキンでこすった。なのにこすればこするほどはみ出して、余計目立ってしまった。

「もう取っちゃうの。せっかく塗ったのに」

フツツと微笑んでキリコさんはナプキンにコップの水を垂らし、一緒にこすってくれた。セーターの襟ぐりから、温かそうな乳房がのぞいていた。

夜、治療したばかりの歯がうずいてなかなか眠れなかった。パフェのせいかもしれないと、私は不安でしかたなかった。そのうえ唇までがひりひりと痛みだした。

私はベッドからはい出し、キリコさんとの秘密を全部、ノートに書いた。

(小川 洋子 作『偶然の祝福』——「キリコさんの失敗」より)

※1 キリコさん……「私」の家でお手伝いさんとして働く、目鼻立ちがはっきりして肉付きのいい、あでや

かな感じの若い女性。

※2 崇高……とてもありがたく、近寄りがたく感じられる様子。

問一 ~~~~~ a ■が高鳴る・b 一 ■飛び」の■に入れるのに適当な体の部分を表す語を、それぞれ漢字一字で答えなさい。

問二 —— ①「私はひるまなかつた」とありますが、それはなぜですか。問題文中の語句を用いて、四十字以上五十字以内で説明しなさい。

問三 [] ② [] に入れるのに最も適当な言葉を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア どうせ新しいおもちゃに夢中になっただけだから
イ どうせ自分たちの知っている漢字ばかりなんだから
ウ どうせ何も考えずに子供がしていることなんだから
エ どうせ勉強するふりして落書きでもしてるんだから

問四 ——— ③「想像したよりずっとわくわくする作業だった」とありますが、この説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の好きな本の一節を書き写す作業は、自分が何を書くつもりかをまったく考えていなくても、自然に筆を進めさせてくれる素敵な営みであつたということ。

イ 自分の好きな本の一節を書き写す作業は、ただ書き写すだけとはいえ、自分自身の手により言葉という形を通して意味を生み出す充実した営みであつたということ。

ウ 自分の好きな本の一節を書き写す作業は、手がひどく疲れるという難点があつても、万年筆を使いたい気持ちを十分満足させてくれる営みであつたということ。

エ 自分の好きな本の一節を書き写す作業は、どんなに苦手な相手であれ、言葉という形を通してすべて自分の味方に変えてくれるいとおしい営みであつたということ。

問五 ——— ④「勉学とは違う種類のもの」とありますが、これは「私」ととつてどのようなものであつたと考えられますか。その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 万年筆という大人の筆記具を使いこなすための一生懸命な訓練。

イ 子供のくせに夢中で大人の真似事に興じているというはずかしい秘密。

ウ 大人から与えられたお仕着せの勉強とは違う自主的で積極的な学習。

エ 思いがけず手に入れた世界の隠された法則をさらに追求しようとする探究。

問六 問題文中の に入れるのに最も適当な語を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 悪意 イ 敬意 ウ 好意 エ 注意

問七 ——— ⑤「インクが□□□」（二か所あります）の「□□□」に入れるのに適当な言葉を考え、三字で答えなさい。

問八 ——— ⑥「二層唇が光って見えた」とありますが、ここから読み取れる「私」の気持ちを、自分の言葉でわかりやすく説明しなさい。

問九 ——— ⑦「ふうん、とうなずきながら」とありますが、ここからうかがえる「キリコさん」の気持ちを表現したものとして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア なるほどね。たしかにそれはその通りよね。

イ ほんとにしつかりした子供だね。知識もあるし。

ウ この子は子供のくせに、なに生意気なこと言ってるのよ。

エ そんなこと今まで全然知らなかったわ。たしかに歯は大切よね。

問十 ——— ⑧「キリコさんの秘密」とありますが、「キリコさん」についてこの問題文からうかがえることの説明として適当でないものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 他の大人たちとは考え方やふるまいが少し異なる、子供と近い目線を持った親しみやすい人物。

イ 子供を子供として扱ったりせず、時には未知の世界にまで導いてくれる頼りがいのある人物。

ウ おしゃれで屈託がなくそのうえいろいろと気が利いていて、大人の女性として大変素敵な人物。

エ ちよつと不良で意地悪な所もあるが、少女のあこがれをたくさん備えたとても魅力的な人物。

* * * * *										* * * * *																																																																																																																																	
問十										問一																																																																																																																																	
										a																																																																																																																																	
										b																																																																																																																																	

* * * * *										* * * * *																																																																																																																																	
問十										問一																																																																																																																																	
										a																																																																																																																																	
										b																																																																																																																																	

氏 名

受 験 番 号

得 点
*